

農林水産大臣賞を受賞された 生産者を訪ねて

(公財)日本豆類協会

北海道くねつぶちょう訓子府町の中村裕一さん(45歳)は、約33haで畑作経営に取り組んでおられ、秋まき小麦、てんさい、ばれいしょに小豆とスイートコーンを加えた5品による輪作を実践しておられます。同じく北海道のこしみずちょう小清水町の臼井富高さん(57歳)は、約40haで畑作経営に取り組み、秋まき小麦、てんさい、ばれいしょに大豆を取り入れた4年輪作の実践とともに小豆の作付を進めておられます。

第52回全国豆類経営改善共励会(主催:全国農業協同組合中央会、株式会社JA新聞連)では、中村さんは小豆が安定して高品質多収で、特に令和5年においても309kg/10aの単収と上位等級100%を確保していること。臼井さんは大豆の単収が415kg/10aと顕著に高く品質面でも優れていることが評価され、それぞれ、小豆・いんげん・落花生等の部、大豆家族経営の部において農林水産大臣賞を受賞されました。

日本豆類協会では、令和6年7月8日におふたりを訪ねて、直接いろいろなお話を伺いましたので、ここではその時のインタビューの様子を報告します。

おふたりともに畑の管理作業にお忙しいなかにもかかわらず、貴重な時間を割いて対応いただきました。また、ホクレン北見支所ならびにJAきたみらい及びJAこしみずのみなさまには日程の調整、当日の対応にご協力いただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

なお、共励会の概要は、本号の別稿をご覧ください。

●中村裕一さん(訓子府町)のインタビュー概要

中村さん宅の倉庫にて参加者が車座になって中村さんを囲みながらお話を伺いました。中村さんのお話で特に印象的だったのは、『『何とかなるだろう』ではなく、無理をしなくても済むよう、常に最悪の状況を想定して、先手先手で策を講じる』という点でした。



中村さんを囲んで

「無理をしない」ことの具体的な例として、土壌管理において、クリアす

る基準を明確化・見える化することが重要と考え、地温を実際に測定し土壌診断も行ってデータを蓄積しているとのこと。また、この地方の冬はとても寒く雪もあまり降らないことから、以前は土壌の凍結が深く入っていたが、近年は暖冬や、まとまった降雪があり、空気の層を含んだ雪の断熱効果で土壌の凍結が浅くなってきています。冬期に土壌が凍結しないと春の植え付け時に土の碎土性が悪く、それにより種の発芽が揃わないなど、初期の生育にばらつきが出ます。また、土壌病害が出やすくなるなどの悪影響もあります。そこで、野良イモ対策として開発された「雪踏み」による土壌凍結深制御（雪を圧縮することで地温低下を促す方法）を活用することで土壌を凍らせて状態を良くしているとのこと。このように土壌管理に気を遣っているのは、春の碎土性改善だけではなく機械作業を行うことで土壌中に耕盤層（一定の深さに踏みしめられた硬い層）が出来てしまい、植物の根がそれ以上はいらなくなってしまう、その下の水分を利用できないため生育に悪影響を及ぼすのを改善する目的があるからだそうです。



小豆畑のほくほくの土壌



根粒菌の付着状況

一番の悩みとして、小豆の野良生えを挙げられました。種の深さがまちまちなので無限に出てくるとのことで、地域の生産者のなかには野良生えのせいで小豆を止めてしまった例もあるほどとのこと。

小豆に限らず他の作物も含めて単収をいかに上げていくかを志向しておられ、小豆は1俵当たり2万円で売れる作物だし、10a当たり5俵取れると10万円にはなり、他方でコストはかからないことから、我が家の儲け頭のひとつと考えているとのことでした。

「秘めた目標単収」は500kgとのこと。以前、坪刈りであるものの540kg取れたことがあるので、決して不可能な数字ではないし、実際、かつて収穫間近の降雹により大半の小豆が落ちてしまい、畑一面が赤くなったとき、「当初の半分も残っていない」と思いながらも収穫したところ4俵取れたことがあり、これが半分だったとすると本来は500kgを超えていたはずと語られま

した。

コープこうべの「フードプランの会」に参加したことが、化成肥料や農薬は必要最低限の使用に留めるように改めて考えるきっかけとなった。この活動で年に1度は関西に出向いており、関西からも個性豊かな人達が収穫体験などに来てくれて、「じゃがいもは日に当たるとなぜ青くなるのか」とか普段当たり前だと思っているようなことや想像もしない質問が次から次へと出てきて触発されるそうです。

中村さんはあんこが大好きで、子供の頃には、ご自宅でこしあんを作っているのをこっそりすくって食べたりしていたとのこと。今でもこしあんをそのまま、あるいはおはぎや団子などオーソドックスなあんこ菓子でも食べ、たまにはお汁粉でも食べられるとのこと。

●今年の小豆の生育状況（7月上旬時点）

その後、車で小豆の畑に移動。ここで、この数日の間に生育が盛り返している様子に中村さん自身も「おっ」といった様子でした。今年の小豆は5月の気温が例年より2ないし3℃低く生育が10日ほど遅れ揃わないところからスタートしましたが、最近になって盛り返してきていました。

ちょうど、畑を見学中に「恵みの雨」が降り始めました。



中村さんの倉庫前にて



中村さんの小豆畑にて

●臼井富高さん（小清水町）のインタビュー概要

JAこしみずの会議室にて、お話を伺いました。臼井さんの言葉で印象的だったのは、「農家は、度胸と継続が大事」です。伺ったさまざまなお話はまさにこの言葉を裏付けるものでした。

豆作りを始めたきっかけは、種いものためだったとのこと。そうか病のた

めに製品化率が低下し、勉強会で、「豆を入れると良い」という話を聞いて豆の作付けを始めたのだそうです。豆を作ってもなかなか反収が伸びず儲からなかったものの豆を入れると確かにいもがきれいになり、そこそこの収入になるならそれで良いと考え、輪作体系に豆を採り入れることにしたとのこと。豆を入れた輪作にしたことでそうか病は確かに減ったそうです。

また、小豆を作り出すようになったのは、毎年の豆作り講習会で全国和菓子協会の藪専務がやってきて、しきりに「小豆を作れ」と言うのを聞いてのことで、6年前からではないかとのこと。



臼井さんの大豆畑にて

大豆の採種は、20年くらい前にJAから、今後は大豆の作付けが増えると予測されるが採種を自分の地域で確保できていないと「いざ」というときに確保できないおそれがあるのでこの地域でも採種生産者が必要ということで相談があったので始めたとのこと。今はJAこしみずの採種組合長をしておられますが、今思うとJAに先見の明があったと回想されました。基本的には町内に必要な量を生産しており、余剰があればホクレンを通じて販売しているとのことでした。

大豆の「とよまどか」は甘味が強くタンパク値も高く固まりやすいため豆腐適性に優れているものの、試験段階では若干小粒傾向な結果が出ていました。しかしながら、実際に圃場で生産してみると前品種よりも粒度は大きく、試験場で生産したものを、現場で生産してみると、大きさが変わることがあり、このようになったのは、品種が若いからだと思うとのこと。また、JAこしみずは、土づくりを基本とした適正輪作の徹底から、豆が大粒になる傾向があるそうです。

小豆の「きたろまん」は暑さに弱い一方、「きたいろは」は暑さに強いしコンバイン収穫に優れた品種のためとても作りやすいとのこと、できるだけ早く「きたろまん」から「きたいろは」に切り替えたいと語られました。

国産の播種機を使っていて、大豆はきれいに落ちるのだが小豆はきれいに落ちなくて、これは大豆は丸いが小豆は丸くないし粒径が毎年変わるからとのこと。作付面積が増えないなら単収を上げることで収量を増やしたく、真空播種機だときれいに豆が落ちるので、小豆こそ真空播種機が良いと思うのだが、機械価格が高いのが難とのこと。

収量アップに向けての技術は結局独学で、とにかくやってみて、失敗するのだが、またやってみる、とのこと。

スマート農業に関しては、平成30年から自動操舵を導入していて、機械を動かしながら運転手が機械の調子を見ることができるというのがとても良いとのこと。また、草取りが大変なので自動草取りマシーンが入るととても良いと思うと語られました。

堆肥は管外の畜産農家から入手していて、大豆の収量を上げるためには有機物を入れる必要があり硫安だけではダメとのこと。大豆は窒素収奪作物であり、土づくりをしっかりとしないと取れないとのこと。



播種機



収穫用コンバイン

●今年の小豆の生育状況（7月上旬時点）

その後、小豆の畑に移動して「きたいろは」と「きたろまん」の生育状況を見ました。「きたいろは」がひょろひょろっと生育していることを確認し、「着莢位置が高い性質がこんな初期生育の段階から表れている」と強調されていました。



小豆「きたいろは」



小豆「きたろまん」